

なるようになるさ、 楽力を^{がくりよく}尽くせ

日本に木が一本もなくなつたらどうなるのか

大学を出て定職にもつかず、三年が過ぎていました。大学に入るにも出るにも普通より時間がかかったため、もうすぐ三〇歳という年齢になっていました。さすがに、私も、親も、これではまずいなあと思い、親戚のコネで、平成元年四月にようやく就職をしました。これまで、口では偉そうなことばっかり言っていて、実は何処かで、自分をごまかして現実から逃げていた生き方でした。自分の不甲斐なさを痛感しつつした後の就職でした。「これから三年間は、理屈なしで我を抑えて仕事に打ち込もう」と決めて仕事をしました。がむしやらに働きました。

多少は、世の中のことも分かり、平成四年一月に結婚、平成六年七月に長男が生まれました。ある日、いつものように、通勤電車で揺られて何気なく車窓に流れる風景を眺めていました。すると、緑鮮やかな数本の木々が左から右へと流れていきました。少し間が空いてまたスーと並木が流れていきます。また、スーと。次々と少しの間隔で流れる樹木のみどりが、妙に気になりました。と、その時です。「もし、日本に木が一本もなくなつたらどうなるんやろ」という疑問が頭に浮かんだんです。今まで、こんなことを考えたことは一度もありませんでした。木や森のない世界ってどんなんやろか?と想像しました。「砂漠やな。南極や北極やな。それと、月面か!」どこも人



萩原 茂男

NPO法人 森林楽校・森んこ 代表

【はぎはら しげお】1959年大阪生まれ。89年広告制作会社に就職。2007年に福井県名田庄村（現おおい町）にIターンし、森林組合に就職、山仕事を始める。04年森んこ結成、代表となる。05年NPO法人化して「森林楽校・森んこ」と改名、理事長（代表）となる。

の住みにくい環境です。そうか木や森って人にとっては無くてはならないものなんやと思つたんです。

それから、いやに木や森のことが気になり始めました。いろいろと調べて、温暖化・砂漠化と言った環境問題や日本が森林大国であること、日本に林業という産業があることも知ったのです。休みの日は、木の多い公園や神社の杜に出かけたり、仕事の日でも、昼休みは近くの公園でポーツと木を眺めていたりしていました。何が私をそうさせたのかは、良く分からないのですが、森林への思いは募るばかりです。

山村にIターンして 山仕事を始める

平成七年の夏、ふと見た求人雑誌で



福井県の名田庄森林組合が山で働く職員を募集しているのを知りました。月給制でしかも週休二日制でした。これならば私にもできるかもしれない。給料は、大幅に減るけど、転職するとしたら、この時期しか無いと思いました。福井県の山村に引越して、山仕事をしたいと家内に告げました。反対覚悟です。でも、彼女の返事は「ええんとちがう」でした。これまでの、私の様子を見ていて、彼女もこんなことを予感していたのかもしれない。

秋、面接の前日に名田庄に入り、病

院や学校や商店などの生活環境をチェックしました。谷間の村ですが、真真中に川が流れ、明るくおおらかな雰囲気に、家内も気に入りしました。さらに、泊まった宿のオバちゃんや家族の人たちとすつかり仲良くなつて、緊張が一気にほぐれていきました。「そうかい、山仕事をしに来たんか。まあ止めとき、山はキツイで。危ないしなあ。しんどいばかりやで。ええことなんもないで、町の方がええで」と、ニコニコ話してくれるオバちゃんでした。そんなことを言われても、なぜか逆に山仕事ができますしなくなるのでした。不思議やなあ。温かな人情に、私はすっかりこの地が気に入りました。でも、面接の結果は、見事不採用。しかし、翌年も募集するからまた応募してみてもどうだという内容の手紙も同封してありました。ここでもおおらかな人情を感じました。早速、世話になつたお礼と、来年も是非面接を受けたい思いを手紙に書きました。

翌年合格し、平成九年四月に名田庄森林組合に就職。家族三人で田舎暮らしが始まりました。名田庄森林組合は、全国から職員を募集していました。そのために、一戸建ての賃貸住宅も用意されていました。私たちは、家賃一万五〇〇〇円で庭付きの一戸建てに住むことになったのです。しかも新

築です。

山仕事は、重労働です。危険も伴います。でも、実際に山仕事をすると、ますます山の魅力にとりつかれていきました。ちよつと仕事に慣れてきた三年目から、森林インストラクターの資格試験の勉強もはじめました。もつと森のことを知りたいという思いと、年をとつてから山仕事に就いたので、万が一の時のために、なにか資格を取つておこうと思つたからです。くたくたに疲れて帰つてきて、晩酌をしたら、もう夜は全く勉強できません。それで、朝四時半くらいに起きて、一時間ほど机に向かいます。森林インストラクターの試験は難関です。もともと試験勉強が苦手なので、勉強はちつともはかどりません。結局、資格を取るのに三年かかりました。しかし、私にとつて、この期間に、試験勉強以外に実に多くの勉強ができたのです。

子どもたちと自然体験

私が、インストラクターの勉強をしていると知つてか、ある日、名田庄小学校の六年生を山に連れて行って、林業や山仕事のことを説明してほしいと言われました。子どもたちに、森や人工林について話をしたあと、林内で簡単な作業をしてもらいました。おっかなびっくり、おぼつかない足取りで林内

を歩く子どもたちを見て、何気なく「林の中を歩いたり、遊んだりしたことがある人って何人くらいいる？」って尋ねたのです。そしたら、意外にも、手を挙げたのは、二割ほどの子どもたち、八割の子どもたちは、林庄（林の中）にも入ったことがないって言うのです。意外でした。林野の面積が九七パーセントも占めるこの山村の子どもたちでさえ、山に行かない、林内に入らない、遊ばないことがわかりました。それも仕方ありません。地元の人たちが、山に背を向けた生活をしているのです。森の魅力や大切さを伝えるのが森林インストラクターの仕事です。しかも、これも山仕事やないか。子どもたちを山に連れて行こう、山で遊ぼうという思いが生まれていきました。

そして、運命の日です。名田庄保育園から「子どもたちと一緒に山で遊んでほしい」と依頼がありました。またとない実践勉強の機会だと二つ返事でお引き受けしました。あいにくその日は、雨でした。園内で遊ぶことになりました。これは困ったなあ。園内で何をしよう。大勢の保育園の子どもたちと遊ぶのは初めてです。子どもたちは、知らないオッチャンが保育園にきて何をするんやろうと、興味津々です。先生が子どもたちに、私を紹介してくれました。もう後には引けません。とっ

さに持つてきた動物カードを取り出して、「この動物なんだ？」とみんなに問いかけました。「知ってる人は手を挙げて！」元気な声で全員が「はい」と手を挙げました。みんなで答えてと言うと、大きな声で「ライオン！」「大正解。よし、つぎにまたカード出すで」ワーと元気に手を挙げて、「うさぎ！」この調子で、十数枚の動物カードで名前を当てっこしている間に子どもたちとの距離も縮まっていました。

じゃあ、次に木のジェスチャーをしよう、お遊戯ホールの窓から見える木の形を体で表現するネイチャーゲームをしました。子どもたちは、実に見事に木の特徴を捉えて体で表現しています。すごい感性。「じゃあ今度は、みんな、でつかい一本の木を作ろう」私は男の子を一人肩車して両腕を大きく広げて木の幹と大枝になりました。その周りに次々と子どもたちが手を広げたり、腕を曲げたりして小さな枝ができていきました。その中で、私の足もとに寝転んでいる子どもがいるんです。「なにしてんの？」と尋ねると「俺は根っこや！」と元気に叫びました。その声と共に、私の足先から頭のとっぺんへと電気のような感動が走りまわりました。どうして、この子は土の下にはえている根っこを表現したんだろう。私には木の根のことなど全く頭にありま

せんでした。まさに衝撃でした。子どもたちの感性に痺れました。

なんとか、子どもたちとの遊びも終わりました。保育園の先生も、あんなにキラキラした子どもたちを見たのは、はじめてだと言ってくれました。でも、あのとき一番楽しく充実したひとときを過ごしたのは、私だったに違いありません。家に帰りぐたぐたに疲れている自分に気がつきました。この充実感、他では味わえない。この時、本気で子どもたちとともに自然体験をしよう！と決心したのです。その時の園児たちは、今中学一年です。

森んこの理念は

「楽力と自然体験活動」

グループを作り活動しようと思いましたが、まず名前から。いろいろ考えた末、「森んこ」としました。この森んこは、森の子という意味と、泥んこ遊びのように森まみれになって遊ぼうという意味も込められています。

さらに、私は生き方にこだわりました。私が、卒業して就職もしないで、ブラブラしていたのは、現実逃避です。その逃避の中には、自分に正直な生き方をしたい、もっと自由に生きたいという思いがありました。これは、現実には、なかなか難しい生き方です。グループを作るのに、今までの生き方を振



森んこロゴ

森んこの活動

NP0法人 森林楽校しんりんがっこう

森んこは、三人の仲間から始まりました。はじめは、気楽に近所の子どもたちと山遊びや野遊びをしたり、気の合う大人たちと野外で飲み会をして楽しもうと思っていたのです。ところが、

結成して間もない頃、村の生涯学習推進委員会から「自然体験指導講座」

り返り、自分がいったい本当は何がしたかったのか、じっくりと考えてみたのです。この作業は、予想以上に大変でした。そして、考えたのが「楽力（がくりょく）」という言葉と考えます。どうせ、この世は、つらく苦しい。だからこそ、少しでも楽しく生き抜いてやれ、死ぬときは、おもしろい人生やっつたと言いたい。そのためには、体力とか知力とかと同じように切磋琢磨して身につける「力」がいると考えたのです。そして、楽力を具体的に四つの力として表現しました。

- (一) 楽しみを見つける力
- (二) 楽しみを作る力
- (三) 楽しみに変える力
- (四) 楽しみを分か合う力

自然体験活動を通じて楽力を身につけることを理念として「森んこ」が発足しました。平成一六年の春でした。

の企画・指導の依頼を受けることになりました。こう書けば、大層ですが当時は小さな村のことです。教育委員会のおばさんと世間話をしているとき、「へえ、そんなグループをつくったん、じゃあ一回なにかやってみてよ」という軽いノリで頼まれたのです。春・夏・秋の三回の企画です。その企画を準備している時、今度はJA若狭の女性部というところから約一〇〇人の家族対象で自然体験を企画してほしいとの依頼が舞い込みました。これはさすがに、私たちの身の丈を超える依頼です。躊躇しましたが、まあ何とかなるだろうと、これまた引き受けました。

さらに、どこから聞きつけたか地元ケーブルテレビ局が、取材を申し込んできました。まだ、結成して具体的に何も活動していないグループに何を取材するのですかと尋ねると、これからする講座とJAのイベントを準備しているところだから、長期で取材したいとのこと。まあ、良い思い出になることだと思い、取材を受けることにしました。

講座も春・夏と好評を得、またJA女性部の自然体験も無事終わりほつとして、その様子も含めて、森んこの活動がテレビで放映されました。なんと一五分番組です。私たちの楽力や自然体験の思いが、実にかつこ良く

まとめられているんです。ビックリ仰天です。地元ケーブルテレビといえども、テレビの影響力は大きいです。その後、あちこちからいろんな依頼がきて、その対応に大わらわでした。一年間でスタッフも一〇人を超えています。

平成一七年八月に特定非営利活動法人（NP0法人）の認証を受けることができました。法人化を機に「森林楽校・森んこ」と改名しました。法人化の一番の理由は、補助金を受けたことです。県と村（今は町）から、林業の啓発と自然体験の活動に、助成金をいただいたのです。公の補助を受けるならば、会計はきちんとしなさいといふことになったのです。少しずつ活動内容も、幅ができてきました。そして、「責任」も生まれてきました。

里山復興事業・地域社会への責任

老左近（おいさこ）という集落があります。たつた三戸の集落です。三戸とも今は人が住んでいません。一戸だけが、年に二回ほどおばあちゃんが帰ってきて掃除や裏庭の手入れをしています。このおばあちゃんも千葉県の息子さんたちと同居しています。無人と

かやぶき屋根の完成式



一五〇年くらいのかやぶき民家です。平成一八年の夏に、どこか森この活動拠点になるところは無いかと、近隣を探していた時に、この集落を見つめました。民家のかやぶき屋根は、いまにも崩れ落ちそうです。よく見れば、里山の雰囲気は今なお良く残しているではありませんか。こんなところで、子どもたちと自然体験や里山体験を、腰を据えてできたら良いだろうなあ。何



老左近かやぶき民家

度か通ううちに、すっかりこの里山にほれ込んでしまいました。貸してもらえらるだろうか。どうすれば、拠点として整備できるだろうか。何をどうするのか、はつきりとしたビジョンもありません。ただ、何となくここで活動してみたいという思いだけです。まったくゼロからのスタートです。まあ、いつものことです。

それから、二年後の平成二〇年一月三日。この民家のかやぶき屋根の修復完成式が地元の人々や関係者によって、盛大に催されました。最初にこの民家の前に立った時には、想像もつかなかつた出来事です。かやぶき屋根の修理は、おおい町の補助六〇〇万円あまりをいただきました。森さんも約一〇〇万円の負担をしました。途方もない大金をかけての事業でした。地元の人々も、はじめは、何をするのかと訝しい顔をしておられました。い

ろいろと交流をさせていたたくうちに、理解をいただき、いつしか応援もいただけるようになりました。平成二一年度からは、この里山を中心として、循環型の暮らしや自然との共存をテーマにしたイベントを開催したり、都市民と農山村の交流の場として、エコツーリズムの場としても活用する計画です。

夢を見据えて、

しかも現実から逃げない。

気楽に始めた森この活動ですが、日々を重ね、多くの人々や地域とのかわりが増すにつれて、責任も重くなり、その分ストレスも溜まります。焦りもあります。苦悩もします。仲間とのイザコザもありました。順風満帆とは進みません。精神的にも肉体的にも疲れがピークに達すると、いつも一人で、森を歩きながら、時には山仕事の中に、呪文のように唱えます。「覚悟を決めろ。楽力だ！」何度も自分に言い聞かせます。

これからも、夢を見据えて、しかも現実から逃げないで、恥をかき、汗をかき、半歩の半歩、森とともにそして、子どもたちの笑顔をエネルギーに進んでいきたいと思っています。拙い文章におつき合いただき、本当にありがとうございます。多くの人々に楽力を。